

第二篇

占夢庫柯後記
三

三七全傳

特別
~13
3148
10



特
六三
3148
15

三七全傳
第二編 占夢南柯後記卷之三

東都

曲亭馬琴編次



雨後の月魄

叢蘭さびらんとすんが秋風さき紙破る。忠臣諫人ととんば庸主
 んと拒む。さき忠義の豹とあるとも。乱離の人とあるとも。人生
 むと五十年三寸呼吸絶まば萬事休と。さき情む身と骨と朽
 して。残る後の名のもろくばや。却説赤根まを道のから神社仏閣を
 井谷坂投て赴く。縁て宿禰の者めれば道とから神社仏閣を
 其処まうて祈念まうて。左よ右たも果敢と。昨日の雨よ。ま
 ぬるけまば奴隷が扇紙助んと。轎子のあつらから。赤いよ。ぞむ
 春の文と。霞に。賤まが籬色の紅梅も。日景小映。くま。

いそぐ天津雁も。あつとどつたれのとどつて歸らぬ旅よりあれど。思を
どくバ急る。その日申の下刻。あつた本谷鉄の舊路ある。標本のころのこ
長と松平の母より。浩如の年の齡六十のありある。老女のつとむ
ののとお母にて。拷の衣の綴り刺す。針月太あると。只二ツある。木の皮の
如くはよれる帯を前よ結び。髻結みらる。自髪を脱れし。俄頃よ
病ひ發りぬと。んえて。母より。泥よ塗る。とも厭つ。道次より。ち
ら。事進のむらひ。いよいよ。とんと。あつ。憐れ。聽て。私車丹三よ。この
老女を扶起に。いづつ。その母より。いよいよ。各洞宿不夜。思はれ。老女
惱める目と。閑た。赤根主。後。せんか。うら。若。び。がる。息次。吻。し。ま。と
今市の里。あつ。い。と。か。さ。け。さ。活。業。張。と。る。の。母。よ。け。り。あ。つ。る。に。去。年。の
長。病。吾。よ。閑。翁。と。ら。も。こ。ら。死。ぬ。う。ら。ひ。け。り。し。ま。過。世。の。新。業。の。

すい滅せどもやむけん。この春のたう。ま。と。う。と。け。り。し。ま。今。朝。も。り。か
子が。友。と。物。あ。ら。ひ。て。その。人。は。巻。倒。され。り。つ。ら。れ。め。の。る。ひ。あ。て。
い。そ。恨。も。憤。り。自。も。忘。れ。親。も。あ。り。で。矢。度。仇。と。打。入。さん。と。て。
茶。刀。引。つ。いて。走。去。る。や。蘭。と。追。け。け。り。し。ま。老。の。足。る。ん。が。の。ひ
あ。て。彼。此。と。索。々。と。復。よ。牙。又。疲。劣。て。忽。地。は。疾。被。り。そ。刀。称。ま。り。に。
怪。ま。ま。の。い。と。苦。く。け。り。え。な。ま。は。盤。櫃。小。牌。を。打。て。統。井。家。臣
赤根。半。之。進。と。寫。一。の。入。隊。う。々。及。ぶ。守。の。執。柄。も。を。在。し。は。れ。の。の
松。平。一。里。が。間。人。煙。籠。各。く。前。経。の。人。と。追。入。ら。せ。え。ま。ん。ご。り。して
過。り。ぬ。と。も。か。く。も。野。さ。し。ま。あ。り。き。る。音。傳。を。け。ら。あ。し。め。り。と
い。ふ。の。後。ま。よ。お。の。が。子。の。憲。人。仇。人。を。救。んと。あ。り。人。情。の。つ。ら。え。え。て。だ。う。は
外。の。よ。り。は。口。説。ま。も。ね。ど。も。半。之。進。は。つ。づ。つ。と。嘆。息。し。難。分。道。路。は

標本の松原に赤根
病る老女とあはむ



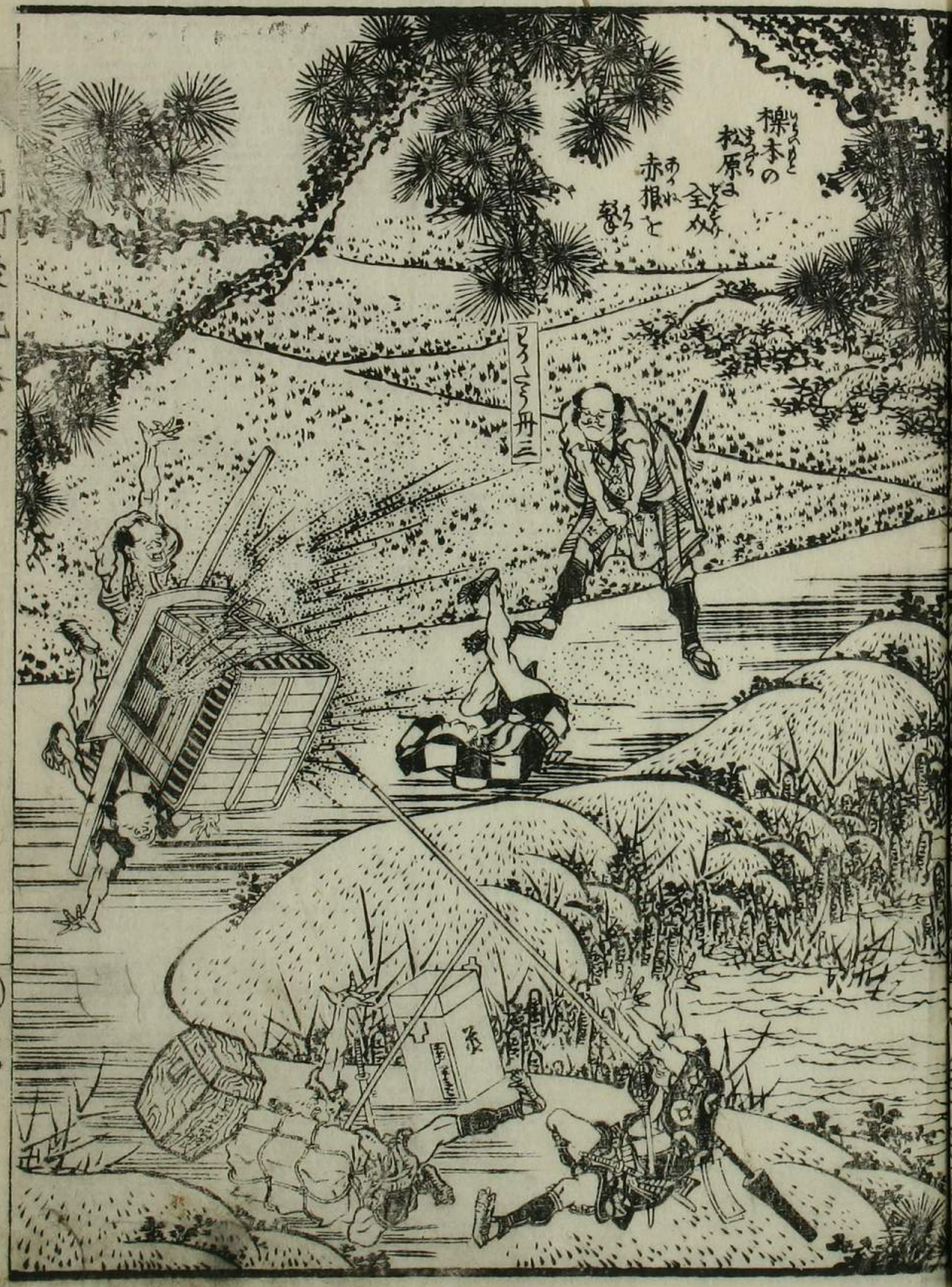
仲々あれが團扇の不徳やうに家宰の罪多う。これ苟も宿老の居ると
 かる老女を救ふと云ふ大なる不徳なれ。あつたあれと今市へ送るとせむ。これより
 平塚へ移す。丹三の老女を。つとを橋子へ扶けて岩屋谷の藤村
 の。村長が宿所へおとゆけ。これの宿所の有れば。汝達より。和途の
 八幡宮へ参詣し。且して追著せ。と。いふと。丹三の眉うちら鎮丹め。
 和途へ。十六六町あり。ようやく私の物請ごとを後者までく俱い
 ぬらん。便る死と云ふおぼやうも。甚だかめさるべ。今この老女が。世に下り
 たる母。うよ目を暮るく。狭き人の實は危し。といふせものへ。どうやら微笑も。
 丹三の老女を。撞見し。と。云ふ。と。丹三の腰に。両刀あり。縦隊の。
 野伏の客を。撞見し。と。いふ。で。害怖る。と。いふ。と。丹三の。野日。縛と
 渡りぬ。と。いふ。と。焦燥。と。いふ。と。丹三の。母。咬。と。いふ。と。

老女とやうに立て橋をききんととらに老女の涙さうづつ。それがま
 りの由もさうば今もまゝぬ露の命の何惜かぶる物侘るや溝尾は
 異つたで泥は塗まへとも厭せぬほど。仁田の細の蒲団布する橋をいへ
 技をて送りやうと宣さるる天衣もまゝ有る。その身の後ゆき
 恩恵を忘るなまづうらひはる程と云つた子孫のちて人あるはらぬ
 身こそ貪りくくそむくその勸学をせんより。その隨分とてと堂を
 合とればまも進んたうなりよれを掉や老女うけぬのまかく汝を
 勤るこころ私の情よあはれこれ困守続井殿の仁政あると。推辞
 なまんのまこれ。そのまゝおはれ汝その子の猛を追ひて却とて死
 せぬその子孫不孝よ隔。かく親の慈悲とらんや丹三由又のよさ
 しくもふ。まもききと。此彼も説示とまぞりじく老女のうつく感佩し。

続井殿の一老職赤根のぬへ上と教ひ下と憐れもあすのまじく牛う
 まふと。いひ由流るもつたはほど。かくまじよとらんとのまじくける味さよ
 人の誠の嬉しれあも。じぶ子のこころを護れけし。あつとせるとやうかに初終
 遠入まの丹三後て戸をうと。まじく仰は後ひて岩屋村へ赴きまのまじく
 まじくまじり程と歩とらそめて追著もせめて晩ての用意よ。これめける
 づつりや。とものが腰を著うける。小地燈を進まればまも進んたはよ
 技をのらうえつ。これを受けやう。その中の七日あるが月のあつたはよ
 あつと。地燈を推さるものまじく。汝が心算をまじく。まじく。と
 秋よ納め。既よなまじく。隣通へまじく。れんとしてまじく。主君よまじく。と
 賜する小刀ハ刀尖は鮮血著う。これ今和途ある八幡宮へ病よ鮮血の
 穢まをうせん。この丹三の年長は。はつて。その初夜もまじく。小聖時これ

領を^あめと^ふ思^んつ。從者^{とも}お^ひて。主^まに對^あひて別^{わか}れを^つ橋^{はし}子^こと^か搦^に記^しし。
 險^{けん}を肩^{かた}掛^かり^の李^りと扛^{かた}擔^{たん}ひつ。標^{ひら}李^りの^のか^ら飛^とりて。別^{わか}れを^つ去^さると^とら^れ。
 小^こ要^{よう}時^じ汝^に領^{りやう}く^べ。これ^の汝^に由^{よし}も^も知^らず。恩^{おん}賜^みの^の一^{いつ}刀^{たう}を^をれ^ば等^ら困^んむ。
 中^{ちゆう}刀^{たう}を^をり^しゆ^んと^と真^まと^らし^ての^のを^を推^お禁^{ぎん}め^り。仍^な李^りと^とら^んの^のが^がり^し。只^{ただ}。
 須^す東^{とう}の^の程^{ほど}ある^る汝^にが^の腰^{こし}の^の刀^{たう}を^を換^かへん。い^づれ^を件^{けん}の^のお^ん佩^{はい}刀^{たう}を^を丹^{たん}三^{さん}小^{せう}。
 邊^{へん}より^よけ^まい^ば丹^{たん}三^{さん}の^のま^まお^のが^が中^{ちゆう}刀^{たう}を^を取^とりて^て主^まに^に進^{しん}じ^し。件^{けん}の^のお^ん佩^{はい}刀^{たう}を^を。
 若^わく^く。う^らち^ち戴^{たい}を^を腰^{こし}に^に帶^{たい}へ^り。事^{こと}進^{しん}の^のこ^うの^のに^にく。や^や丹^{たん}三^{さん}病^{びやう}お^お。
 老^{らう}女^{にょ}を^を道^{みち}に^にお^のら^ひて^て勅^{しやく}ま^まに^に。衆^{しゆう}皆^{みな}由^{よし}死^し。假^{かり}し^しら^らま^まに^に。
 從^{じゆう}者^{しや}ハ^ハ三^{さん}の^の後^ごと^とも^も以^もて^て低^ひ遂^{ずい}よ^よら^られて^て去^さり。ま^まに^に進^{しん}の^の從^{じゆう}者^{しや}。

亦^{また}中^{ちゆう}で^で目^め送^{そう}る^る。これ^は今^{いま}和^わ迹^{せき}の^の八^{はち}幡^{ばん}宮^{みやう}人^{にん}請^{じゆう}と^とも^も今^{いま}月^{げつ}二^に更^{げう}の^の。
 比^ひ及^{およ}び^び山^{さん}屋^や村^{むら}人^{にん}到^{たう}り。彼^か知^ちら^らず^ず。采^{さい}谷^この^の遠^{とほ}く^くに^に從^{じゆう}者^{しや}亦^{また}去^さ途^とよ^よ。
 疲^{つか}勞^{らう}を^を熟^{じゆく}睡^{すい}を^をし^しんと^と死^しゆ^ゆ。按^あて^て潛^{ひそ}り^り本^{ほん}精^{しやう}塚^{づか}の^の辺^{へん}に^に赴^{しゆ}す。こ^こら^ら。
 ま^まづ^づは^は腰^{こし}を^を切^きて^て居^いる^る。あ^あら^らま^まの^の怪^けの^の祟^{すゐ}。須^す原^{げん}負^おむ^むの^のが^がら^ら。繞^つ井^{けい}の^の。
 家^いの^の安^{あん}寧^{ねい}を^をみ^みん。この^の曉^{あけ}を^を臨^{りん}終^{しゆう}と^と。ま^まに^に家^いの^の妻^{つま}や^や子^こが^が結^{むす}つ^つあ^あら^らん。
 不^ふ便^{べん}。現^{げん}若^わの^の武^ぶ夫^{ふう}の^の。い^いけ^け入^いる^る。滅^{めつ}の^の道^{みち}よ^よと^とひ^ひら^らと^とら^らつ^つは^はく。
 杖^{しやう}を^を曲^まら^らぬ^ぬ一^{いつ}と^とら^らし^し。暁^{あけ}を^をめ^めづ^づつ^つて^てい^いそ^そだ^だ去^さる^る。仍^な丹^{たん}三^{さん}の^の橋^{はし}子^こに^に。
 病^{びやう}臥^ふせる^る。老^{らう}女^{にょ}は^は物^{もの}を^をこ^こし^して^て勅^{しやく}を^を慰^いめ^め。標^{ひら}李^りと^と松^{しょう}系^{けい}十^{じゆう}町^{ちやう}あ^あら^らむ^む由^{よし}く。
 仍^な枝^{えだ}葉^{えは}隙^{げき}を^をれ^れ並^{なら}松^{しょう}の^の梢^{さか}よ^よ。日^ひの^の暮^{くれ}ま^まに^に。い^いづ^づれ^れか^から^らと^と晴^はる^る。
 して^{して}火^ひを^を漬^ひけ^け。繞^つ松^{しょう}よ^よこ^こま^ま疾^{しやく}ら^らし^し。衆^{しゆう}皆^{みな}や^やく^く道^{みち}を^をめ^めと^とめ^めて^て亦^{また}。
 八^{はち}九^{きゆう}町^{ちやう}也^や。仍^な月^{げつ}の^の出^いで^でま^まに^にこ^こら^らら^ら。この^の知^ちの^の特^{とく}に^に路^ろ狭^{せう}く^く。老^{らう}松^{しょう}小^{せう}松^{しょう}。



河可及己卷三

南村仙言

たたふら。強が上は生盤あつて。昏いふ由暗けま。夜のまらふ月も
 漏る。ふり照すと続ね。の。御導をく。衆皆鳴り。呼み。れ。事。して
 この樹下圍をま。り。過。ま。る。日。今。月。の。昇。る。か。と。お。尋。ね。て。此。一。足。り。の。の
 明く。あ。る。に。さ。ら。嬉。し。く。丹。三。の。主。の。の。ま。さ。ひ。や。ま。の。や。く。八。九。人。ら。ら。は。れ
 くら。て。送。り。人。を。便。は。す。も。の。向。う。海。へ。は。よ。背。の。樹。間。を。只。ひ。と。り。さ。ら。ら
 れ。さ。る。も。来。ぬ。の。難。若。よ。乃。堪。じ。と。使。あ。る。は。じ。と。や。追。ひ。申。著。ぬ。へ。は。間
 ち。つ。や。来。ぬ。人。と。と。く。た。高。く。声。を。ま。鳴。り。け。て。か。ん。く。と。目。ざ。り。も
 志。ぬ。野。于。玉。の。鳥。夜。ぬ。か。ど。ひ。く。り。昇。ん。と。さ。る。月。を。仰。ぎ。て。亦
 百。あ。り。ま。り。ま。り。過。る。よ。忽。地。背。後。よ。筒。音。高。く。飛。ぶ。後。九。丹。三。が
 た。の。膝。三。寸。搦。傷。を。と。橋。子。の。戸。を。碎。く。む。り。よ。あ。あ。と。礮。と。打。扱。さ。る。
 裡。の。若。と。叫。ぶ。声。と。さ。り。小。浅。瘡。の。丹。三。も。灸。所。の。れ。踏。も。と。さ。る。に。

意。づ。く。倒。さ。り。衆。人。の。聲。う。う。と。あ。ら。う。に。不。意。人。ら。ら。の。け。り
 疾。炮。よ。膽。を。ひ。が。れ。碎。易。し。橋。支。の。橋。子。を。投。居。或。は。産。櫃。と。捨。給。を
 逆。さ。ま。に。松。ね。ま。さ。り。や。う。や。う。と。そ。ろ。ろ。と。は。た。き。び。つ。い。く。時。り。て
 度。を。失。ひ。身。を。脱。ぎ。と。む。り。に。暴。風。よ。尾。羽。を。痛。め。る。雀。の。只。共。鳴。よ
 迷。ふ。か。如。く。株。よ。蹴。り。け。泥。よ。こ。り。て。右。往。左。往。よ。散。乱。し。足。小。信。り。く
 逃。失。し。り。かり。し。程。よ。撲。大。地。と。梢。を。降。る。地。等。は。て。牙。長。高。一。個。の
 癖。者。う。う。と。う。子。拭。り。て。面。を。裏。こ。長。さ。一。刀。を。帯。り。る。が。め。る。疾。炮。を
 鼻。難。と。投。捨。刀。の。琿。推。放。つ。橋。子。の。裡。を。目。か。け。て。ま。り。よ。う。人。と。さ。る
 ところ。を。丹。三。岸。破。と。身。を。記。し。癖。者。ま。く。と。呼。と。む。る。と。應。由。る。せ。い。と
 声。の。下。り。り。閃。と。抜。て。う。ち。か。る。又。の。光。よ。身。と。ま。り。刀。を。か。り。め。く
 受。る。は。六。七。合。残。ひ。が。何。と。う。ま。け。ん。丹。三。が。刀。忽。地。錫。際。う。り。獲。毀。と

おろればお忙しく。とどろみくさより領する。おん佩刀を引抜て痺者が
彌と刀尖さぐりに丁と破る紙拂い除く踏込で打大刀風乃
烈した丹三六夫傷の鳥銃砲瘻の特痛く進退も自在な
毒ややく衰て背を破れ胸前を穿き隠くと痺者の如く
洗刷し顯を隻足は踏居て吹くけと刺刃を添る鮮血と
そのふ天の羽のさう潮や松の杪をさるる月をうち仰だる面
庸人あはばんえふり。

木末の貞滴

國子君のけきまは四民聚る隊は主のけきまは後頼全うらば
まは徒者ホハ。さるる悉腫せしあふざれど御よその主ふ
ヨラれて人のさうひとらるるだ。さるる圍夜は跡絶る松末と過るる

と管に歩武のそんとおりのもお後さるる連るおれお。あつる疾
打つれは。まは教は舞じらんとえは。或は旦の席張避は。或は
る侍とまは近よ告んと。四零八歳は逃は。遂は丹三と教り。おは
痺者の丹三をさるるまに刺殺せ。血刀ヲ提て橋子を執ひ猛く信と
暇へ怨敵赤根羊之進る。呼吸のふくも受け。往時亨禄元年十月
陽の六月。浪速ある相合橋も。汝がお小勢れたる。今市全八郎が。子全
といひが。父が。おれ。そのひ。僅小襦袢の中。小あり。され。年長
たる。去年の冬。まは。父を。さるる。仇を。さるる。近曾養母の。物。り。り。あ。り。
共は。天を。載。さる。汝が。お。を。さる。も。て。た。れ。が。猛。は。大。和。住。居。を。接。し。の。
春。り。あ。の。び。く。小。担。お。んと。さ。れ。れ。も。身。さ。へ。貪。り。由。縁。も。あ。れ。が。
城中。入。る。便。を。得。せ。老。た。る。養。母。の。絆。と。さ。れ。が。お。も。あ。ら。せ。然。止。し。す。

宿怨を執つぐれ。時至ても、女主人の祈を受夜を日小継と米谷へ
 赴く。さこの心をゆくも傳使。今朝より跡を跟られども、汝が後者殺められ
 ぬ。さくくをよきやまびの松原を過る。自ら暮るんと推量。捷徑より
 走り先づら。こ小ねと久しうたのその頭を受らん。と声高き小罵の
 の必、橋子の戸を躍ひらげ、月の光玉の隈ありも、さう入る。橋子の裡を
 鮮血を塗れつ。卧する。力の仇人ありて、養母晩縮まり。是はとらり
 仰さゆ。小駭死倒とまんとて、泥小なりて身を起し。中よ母に全みよて
 小を何なるこの橋子は、杜乗らんと坐したる。さう入る。と中よあられた。あや
 仇人小謀られん。邂逅せられた時をゆき。既よ怨を復せし。とひひりのを
 されい。と涙まるとも、朽ちるとも、この紫のあつく小恨なり。とも、今更
 のひらたが、天の縛母の教。後さし罰。目前五逆の罪人。このハチ
 百十遍。さがる。身が恨し。と。蹠踏し。つ。声を惜ま。草を咽て。哭し。が。中
 小涙を拭ひて。卧たる。母を抱え起し。喃母。瘡の漬くをいさる。と。鬼よは
 ぬ。と。勅つ。又。咄。び。活。つ。中を。ら。橋子。より。扶。出。す。ぬ。の。が。腰。小。結。び。た。る。定。ま。拭
 引。解。く。瘡。口。を。楚。と。結。び。又。高。中。より。活。る。その。声。を。も。て。耳。よ。り。て。中。細
 中。小。眼。を。睜。す。和。殿。の。仇。人。を。殺。した。が。て。か。ま。丸。ま。り。殺。母。と。呼。ぶ。を。い。れ。ぬ
 づ。ら。ど。勿。論。さ。ら。ぬ。が。幻。釋。と。死。祖。母。さ。り。祖。父。さ。り。る。とも。小。家。を。捨。棄。し。て
 出。漢。西。の。あ。ら。と。と。通。り。後。小。却。り。あ。ひ。その。と。た。和。殿。の。祖。母。さ。り。が。吾。侪
 小。憑。を。ば。え。て。汝。且。く。これ。を。受。ま。さ。る。べ。し。人。の。子。と。も。す。と。と。宣。ひ。け。が。汝。が
 子。よ。と。す。と。い。ら。ぬ。ゆ。ら。び。さ。る。と。た。の。世。は。つ。れ。る。母。と。呼。ぶ。る。と。呼。ぶ。が。假。初。の。私
 言。口。の。り。ま。も。吾。侪。の。お。よ。和。殿。の。主。さ。り。主。の。孫。さ。り。さ。り。や。仇。人。と。思。ひ
 た。が。今。傷。る。と。あ。れ。が。と。五。逆。十。惡。と。い。ふ。う。ゆ。ら。ん。や。お。ぼ。ぬ。と。あ。ら。と。と。言。ふ

小変る言の禁の嚴と正しん全女の悔羞る母の慈悲玉るん全女熱湯
 の沸くる如く涙を拂ひさ室のまるん全女を悪虐殘忍の人よとて身を殺
 し今更小言禁を設て不孝の罪を脱とての心小丁を如此思百仁慈
 の浅からぬも浅まらば。あん身が主の孫もゆめれ襦袢の中より養れぬ
 人のまよりたれがねららぬ母より子より乳母とのみともあつて母といふ
 字に別らねば言さる夷狄の國より親を殺すゆめりたる安けども入内て
 人よたらんと生さる人よりぬ人とらねらる一日ゆめり身を容る里あらば
 うこそ中今の世も波婆めりとも扁鵲めりともその深癢をのりゆめり故
 とて済まんや只あつて母の前は後も果さぬ息の下よ又小伏て犯らる罪の
 首が一を懸るべし。許さるべしとらね口説刀を逆まよらるは正に晩福を
 吐嗟と牙の苦れを忘るまよと博禁めり物に好むと哀れ
 うらせ身の息のつある吾儕を損る物とら情と怒されば頭を擡ん
 小も右も全女を助んとてまよあらば母よゆめり宣ふの理まよ似て理あら
 竹鋸の牙を挽き木の抄の鼻らるるを。我が私のかひとらよ自殺せよ身の罪
 を重るよ似たれどもいまは。梓樹あつたが傷けたるのを殺すよゆめりめり
 られをむす小冥土の先鋒ゆめり又とらるはと又を禁めてめる愚いや
 ぼららる。吾儕の和殿を養ひたる母といふ。母もせよ。この深癢の鉄炮を
 打れたる瘡まのららる。展覧て身の罪のゆめり。この全女意を
 びせその虚言ゆめりゆめりゆめりゆめり。息を継ぎ身の愚まよゆめり。傷を
 を向死とらる虚ゆめりゆめりゆめり。世よあらば。この瘡見ぬ。この
 全女の疑ひつゆ血を拭ひ結び添たる布引とらる肉向く。この瘡口をさる
 かつらる。咽喉のゆめり。二寸のまよ。僅に呪外とたれども。吻く毎血の潰く。

南村後言卷三

九

めも眩らろ消るがどれ涙の玉やあつらん志度の浦曲の雲あらず。とそ乳のや
 痕四五すいづとも灸所の痛まあり全夜の月を燭ふつぐとえてあつび終る
 しが鉄炮の寃違で橋子の戸を打抜たるよられいひく刀瘡憑りたる天神
 地祇も捨ぬらんららげも母を救せ罪をば辛く脱きたり。これをさうまうと
 ぬふもあは悲しめた母の絶命か多るふ半之進這奴全女が母と知て誰引出
 刺殺して橋子へ隠せし幸は。一す緋の絶ぬぬやあらんぞらんものうはて赤うへを
 切らも仇人よあらん実父養母の雙敵累る怨い這奴が頭を粉に砕き
 鹽するくとも飽む赤根が往方ありつ米谷小勝勝負を決せん。さうと小勝
 立ちあがり拾り詰たる巻の上よなごる涙の玉霰砕くいと物おふ孝子の歎
 ぞのれある。晩縮の苦れた息のつよ。か子の顔をうら瞻る縁故をありあ
 移がとの疑ひのたれんれとせし誠める人の心を。さら山さらくふ和殿を雙
 ともられを又和殿の母とも赤根ののちるべん中うのわらうるべし。男児の生
 とひあがる道あらぬ故に移れぬの。父の怨を復んとて。天和洛(う)の王住
 活業に假托し毎日平城(交)加つ。彼人を寃めぬと藤より猪(な)れども流石
 小うらもの(じ)あつた。さらぬ所おとどひあがら禁するすもあつり。昨夕より和殿
 の気色持更に怒を合今朝未明をよ遠く。刀をさへ隠しりちて是王の心
 ぬひうづい。うまうくむりとあ。うらもあられで跡追ふて日の暮るまうと。彼此と
 索められど竟えあつた。疲勞て忽ち痛は胸をさう塞とこの松原の
 ありあ。道次よりち臥たり折しゆぬ旅する武士の後者八九人をおく橋子
 を擡らしたるが。吾侪をえんうてあつ。憐れ可憐小同る小を病は重た
 頭を擡る。不圖燈櫃を向上まじ。鏡井の家臣赤根半之進と牌を打たり
 送は面は認らぬど。公は恥るこのとるんが名告をも。只管は推辞小れど

めも眩らろ消るがどれ涙の玉やあつらん志度の浦曲の雲あらず。とそ乳のや
 痕四五すいづとも灸所の痛まあり全夜の月を燭ふつぐとえてあつび終る
 しが鉄炮の寃違で橋子の戸を打抜たるよられいひく刀瘡憑りたる天神
 地祇も捨ぬらんららげも母を救せ罪をば辛く脱きたり。これをさうまうと
 ぬふもあは悲しめた母の絶命か多るふ半之進這奴全女が母と知て誰引出
 刺殺して橋子へ隠せし幸は。一す緋の絶ぬぬやあらんぞらんものうはて赤うへを
 切らも仇人よあらん実父養母の雙敵累る怨い這奴が頭を粉に砕き
 鹽するくとも飽む赤根が往方ありつ米谷小勝勝負を決せん。さうと小勝
 立ちあがり拾り詰たる巻の上よなごる涙の玉霰砕くいと物おふ孝子の歎
 ぞのれある。晩縮の苦れた息のつよ。か子の顔をうら瞻る縁故をありあ
 移がとの疑ひのたれんれとせし誠める人の心を。さら山さらくふ和殿を雙
 ともられを又和殿の母とも赤根ののちるべん中うのわらうるべし。男児の生
 とひあがる道あらぬ故に移れぬの。父の怨を復んとて。天和洛(う)の王住
 活業に假托し毎日平城(交)加つ。彼人を寃めぬと藤より猪(な)れども流石
 小うらもの(じ)あつた。さらぬ所おとどひあがら禁するすもあつり。昨夕より和殿
 の気色持更に怒を合今朝未明をよ遠く。刀をさへ隠しりちて是王の心
 ぬひうづい。うまうくむりとあ。うらもあられで跡追ふて日の暮るまうと。彼此と
 索められど竟えあつた。疲勞て忽ち痛は胸をさう塞とこの松原の
 ありあ。道次よりち臥たり折しゆぬ旅する武士の後者八九人をおく橋子
 を擡らしたるが。吾侪をえんうてあつ。憐れ可憐小同る小を病は重た
 頭を擡る。不圖燈櫃を向上まじ。鏡井の家臣赤根半之進と牌を打たり
 送は面は認らぬど。公は恥るこのとるんが名告をも。只管は推辞小れど

仇人^{うとま}を祖替^{うらひか}ん
とて更^{さら}よ
怨^{うらみ}を
まけ

全
女

お
糸



古今
秘^ひの^のま
つひ^{つひ}ん^んや^やら^らん^ん
とて^{とて}ま^まさ^さら^らめ

彼人元来上致致ひ下を憐むらる深々と豫言し一と点違りぬ。かく小勲も真
 今小説論しく。吾侪を橋子又扶桑の岩屋村ある長が宿所へおておけとて
 私卒丹こと中らんはすえおたぬ。和途ある神社へ宿願の音のれが立あから
 春らんとして後者俱せむ。彼人といふ。道は列れまぬ。ひたぬ。道すがら。あ
 丹三つら。鳴く人のいと。叮嚀は勲を慰め。橋子の内よりける。腋紗物うち披
 て梨子のひらうり。出られぬ。殿のめい。のまじる。春の梨子のめづらう。あらん。す。
 湯はれをなぶ。うとて。あのか。カは著たりける。刀子をそえて。とらしたり。まといひ
 家隸といひ。あくま。好意うらう。うの。を。の。つ。ある。過世の悪業小や。つ。つ。子の
 実父の腰きたる。か。る。仁者を謀らんとて。可惜命を預らん。と。れ。さ。の。あ。る。よ
 全女が。父を。あ。り。へ。ハ。生憎。よ。の。道理。も。つ。う。も。ま。ど。り。か。の。め。の。旅。ま。れ。ば。途
 かく。粗。物。め。んと。て。宿。を。あ。り。疑。ひ。あ。の。ま。う。と。う。と。と。あ。り。よ。ど。痛。ま。ま。と。う。う。

詰り。刃の苦れた。は。甚。秘。ども。老が。命。つ。も。惜。ん。赤。根。ぬ。は。恙。あ。り。れ。そ。あ。り。あ
 毎ふ。ふ。の。れ。り。と。苦。れ。た。ま。に。神。佛。へ。入。ち。ら。ぬ。堂。を。合。し。禱。る。外。化。する。は。は。は。
 暮。て。い。いと。樹。下。暗。れ。ら。の。松。原。を。さ。が。ら。よ。打。り。け。ら。れ。た。る。鉄。炮。を。丹。三。ど。の。め
 矢。庭。よ。休。ま。橋。子。さ。は。打。抜。た。れ。ど。却。吾。侪。は。恙。り。こ。い。全。女。が。所。お。ひ。す。を
 ら。も。て。そ。を。を。果。さ。ぬ。が。あ。る。不。跟。寃。う。その。ま。い。の。命。も。終。よ。あ。る。虫。の。火。虫。の。死。り。ら
 焼。る。と。く。彼。人。の。も。よ。死。や。せん。理。せ。あ。る。も。當。ら。ぬ。か。を。を。救。諫。ん。ふ。り。と。う。い。て
 死。ば。彼。人。よ。の。の。が。誠。も。と。う。く。べ。く。全。女。も。仇。讐。を。お。ひ。と。ま。る。と。の。や。と。ら。の。着
 一。つ。を。恩。愛。と。羨。望。よ。う。え。は。く。臂。近。る。彼。刀。子。を。探。取。王。咽。喉。乳。の。下
 臂。が。け。ども。老。の。養。の。う。ひ。な。さ。い。消。果。も。せ。ぬ。月。の。野。も。山。も。あ。は。れ。ま。さ。と。あ
 公。る。と。さ。猜。し。て。た。ぐ。い。の。声。は。弱。ま。ど。も。命。つ。れ。る。は。柝。茶。の。落。る。程。も
 とき。わ。ん。全。女。の。け。く。毎。よ。竹。と。懸。ん。と。ぶ。と。ぶ。絞。す。もの。ぬ。布。子。の。そ。を。を。

姉夫半六と云ふ不憶僥倖ありて。統井殿小見糸一。五條の縣主と云りしは
 その比灰は傳はるが。姉の論條との次の年又身まうりぬ。八才の悞で
 勸解んも既に便著を失ひつ。富る縁者を有らうら。身の賣しをゆも
 昔ん故れもどん小後の居立の道に結果もれた大和津の國まきうらでも世を
 憚まが故郷のぞらつとまきくあらゆと。どふつりて奇に半六を汲引
 のひーと云えたる。典儀の所妻は由縁の口屋奉る。口外任功の
 半七と同僚なり。今市金八の遺子にり。和殿を子と。母と云ふ。こま
 ら脱れぬ因果と云へば。よくうらまうを。匿のゆら大和の赤根氏の
 ると。六耳列立て空漏は。と物り。赤根親が浮沈のゆ。又金八の
 口外任の口秘のうをま。おぼろけらる。ゆも。やと。あら。白く。ありつるよ。
 法能米よりらる。受一袋の口。向を。や。彼人と和殿の。ま。の。好
 友を告たり。より。忽此は。父の仇を。替んと。目ま。ゆ。和殿。か。健。氣。と。
 とも。等。ま。ね。仇。あら。び。ひ。絶。と。ころ。ゆ。も。和。一。さ。よ。如。此。ま。の。美。理。の。る
 う。い。ゆ。も。昔。び。憂。身。の。と。ま。よ。奈。良。坂。や。見。ま。柏。の。あら。ね。と。も。親。ま。ま。か
 裏。表。赤。根。が。ゆ。ま。者。と。あり。只。彼。人。の。矢。面。は。立。て。ら。の。身。を。殺。んと。ま。か
 誠。を。捨。ぬ。ぬ。神。と。佛。の。導。れ。ま。や。年。と。り。ゆ。故。御。の。山。迹。に。死。出。の。刻。の
 山。今。ら。ら。ど。も。ゆ。れ。と。ま。よ。列。れ。り。外。任。半。七。を。代。り。て。死。ぬ。ら。い
 冥。土。に。在。る。姉。論。條。と。の。姉。夫。の。半。六。ゆ。の。恩。報。し。が。外。任。い。い。ゆ。か
 め。七。才。の。八。才。の。比。あり。れ。ば。類。も。認。ら。ど。外。叔。母。あり。とも。ら。ら。ど。や。ゆ。ら。を。ゆ
 の。れ。ど。病。も。死。が。冥。土。ま。よ。姉。姉。夫。の。面。を。背。の。罪。科。は。阿。鼻。焦。火
 熱。の。阿。責。ゆ。ら。ま。ゆ。べ。れ。は。惜。あ。ら。ぬ。身。奴。今。茲。ま。ゆ。存。命。な。れ。ば。此。實。今
 たら。う。く。目。を。瞑。る。ら。ま。夫。又。四。郎。と。の。生。涯。賣。り。く。世。を。送。了。四。十。の。ま。ゆ。の

中より。又。又。吾。吾。傍。が。み。伏。し。し。非。命。は。死。む。も。う。ら。た。る。と。さ。の
 漢。奔。人。を。苦。し。め。身。を。苦。し。め。造。惡。の。報。ひ。を。り。た。に。推。た。り。を。身。を。
 父。の。仇。人。と。指。り。の。天。下。を。わ。ら。ざ。め。れ。ど。孝。公。の。ま。ま。は。親。も。仇。人。の。外。叔。母。を。
 殺。す。苗。た。り。ら。れ。ら。の。道。理。を。辨。し。入。を。恨。む。身。を。殺。し。家。を。興。し。く。亡。び。の。
 侍。者。を。愛。む。や。と。の。声。次。第。は。細。さ。も。深。痰。は。足。ら。ぬ。長。の。の。や。り。の。
 虎。も。雄。く。う。ま。え。たり。さ。れ。ば。畏。て。改。ま。ば。君。も。か。れ。死。ん。と。う。言。ふ。は。
 賢。者。も。う。と。これ。を。せ。り。親。の。晚。稿。の。老。女。を。う。た。り。た。時。の。漢。奔。ま。て。一。生。
 を。恨。た。れ。今。悔。も。ある。と。た。の。好。論。論。を。ま。ま。と。考。ら。ぬ。微。妙。と。の。子。を。
 教。する。男。児。も。羞。る。も。多。や。と。入。主。奴。の。額。小。汗。し。膝。も。子。を。驚。馬。耳。を。傾。け。
 首。より。尾。も。を。孰。と。さ。す。と。嘆。息。し。一。く。あ。ら。ぬ。の。如。く。因。縁。の。あ。ら。は。を。
 一。点。ご。つ。も。も。ら。ら。し。め。の。が。母。の。世。は。在。ん。親。の。復。讐。言。の。あ。ら。ひ。絶。し。と。か。を。

中より。又。又。吾。吾。傍。が。み。伏。し。し。非。命。は。死。む。も。う。ら。た。る。と。さ。の
 告。げ。り。も。り。た。れ。あ。の。が。恨。む。實。父。の。怨。を。復。た。る。も。更。は。養。母。を。喪。つ。孝。道。と
 ら。れ。を。い。ん。や。特。は。痛。ま。を。負。た。る。親。を。草。の。上。に。居。て。その。死。を。忍。ぶ。罪。深。
 喃。声。の。を。焦。燥。く。長。ま。り。の。の。い。ひ。ぬ。は。殊。更。は。命。も。危。し。む。夜。風。
 瘡。口。は。う。り。と。破。傷。風。と。あ。ら。れ。療。養。終。つ。と。た。の。い。づ。に。負。た。ぬ。医。師。許。
 伴。ひ。も。あ。ら。ず。と。立。つ。る。を。撫。さ。り。て。改。を。掉。虚。氣。に。と。す。の。を。活。ん。と。さ。る。
 ら。め。り。の。も。又。は。牙。を。傷。ら。ん。ぢ。ひ。一。し。の。果。つ。只。惜。る。ハ。親。と。子。が。そ。ね。
 若。殘。由。一。世。の。列。と。う。た。れ。と。も。ん。と。さ。る。只。吉。し。を。う。ら。あ。ら。う。身。の。ほ。ど。
 安。く。果。あ。へ。と。草。茶。の。茶。は。より。祈。る。の。南。無。阿。彌。陀。佛。と。唱。め。の。い。ふ。子。
 の。血。を。う。ら。り。し。中。咽。喉。は。突。立。吐。け。切。刃。を。抱。て。破。と。俯。と。ひ。り。隙。も。
 あ。ら。揚。の。袖。の。い。と。朽。ま。さ。る。全。女。の。ろ。ろ。も。小。消。ま。ん。毒。の。草。の。上。に。卧。

たる母の亡骸を抱死起し又哽咽更善悪もさうさうしが忽地儼とあひ
 契りて乱れたる鬢實の毛を拊ぬる襟の合し母をら及を扱とりつ
 亡骸より対ひ母の魂魄を召まらざらん今全女がもう人をもせよ
 人あつたつともその子ごうく仇を報むべはれ父を否とるやあれがも今
 ら小志を果せられたる又養母へ不孝とわれが仇を報むべはれ仇を報むべ
 めるべからん某一文一字を識らねど幸うて守るとありむ唐山の豫讓
 と母らん知伯が衣を刺て怨を復り例をどりつれも今羊と誰が
 橋子を打たれつ怨を復せよ擬ふべしさればとく阿容と存命ん
 人小あらと速は自殺し親の屍よりさうり共よこの野の大肥さん
 母の神具く約す冥土の旅の郷導よめされしといひもあは諸祖は
 ち血刀を腹へ突立んとするよらひもあはれど忽地背後へ人影し
 等よと一声母も果とをど抱死とあう全女の髪を怪しむを
 反ら頭を回ら隈られた月又えつれば則別入る去年の秋を月
 六の月浪速より列しつり絶る音耗せざりける賊賊鬼の四五六
 らんばつたそのもつらとをりり且羞るのめとををさるん当四五六
 りりあつたを奪取し靴を納めつ只管と嘆息し今よ全女友とら
 交り喝せんが今よまたたりを奇しくとをからぬれも不忠議
 小あつたさ去年の冬和主の母れを肩て竹地ともあつた逃去り
 もその次の日活業のひよ啓行してこの大和路へ赴た六田下市を
 つ吉野の林麓へ春を迎へ睦月の下旬に標本は旅宿をかえそ彼此と
 あく駈あつたけども和主親よがとらつたにあらういふ田中の里
 あり人の心きて蕎麥食せん亭午より来るとのわかれりいひる半日

たる母の亡骸を抱死起し又哽咽更善悪もさうさうしが忽地儼とあひ
 契りて乱れたる鬢實の毛を拊ぬる襟の合し母をら及を扱とりつ
 亡骸より対ひ母の魂魄を召まらざらん今全女がもう人をもせよ
 人あつたつともその子ごうく仇を報むべはれ父を否とるやあれがも今
 ら小志を果せられたる又養母へ不孝とわれが仇を報むべはれ仇を報むべ
 めるべからん某一文一字を識らねど幸うて守るとありむ唐山の豫讓
 と母らん知伯が衣を刺て怨を復り例をどりつれも今羊と誰が
 橋子を打たれつ怨を復せよ擬ふべしさればとく阿容と存命ん
 人小あらと速は自殺し親の屍よりさうり共よこの野の大肥さん
 母の神具く約す冥土の旅の郷導よめされしといひもあは諸祖は
 ち血刀を腹へ突立んとするよらひもあはれど忽地背後へ人影し
 等よと一声母も果とをど抱死とあう全女の髪を怪しむを
 反ら頭を回ら隈られた月又えつれば則別入る去年の秋を月
 六の月浪速より列しつり絶る音耗せざりける賊賊鬼の四五六
 らんばつたそのもつらとをりり且羞るのめとををさるん当四五六
 りりあつたを奪取し靴を納めつ只管と嘆息し今よ全女友とら
 交り喝せんが今よまたたりを奇しくとをからぬれも不忠議
 小あつたさ去年の冬和主の母れを肩て竹地ともあつた逃去り
 もその次の日活業のひよ啓行してこの大和路へ赴た六田下市を
 つ吉野の林麓へ春を迎へ睦月の下旬に標本は旅宿をかえそ彼此と
 あく駈あつたけども和主親よがとらつたにあらういふ田中の里
 あり人の心きて蕎麥食せん亭午より来るとのわかれりいひる半日

生業を止めし。彼処に赴死し暮るる松原まき。和主の母が
枉死の顛末嚮うりつらりし。母もあつるが。あはれつたをたらんと思ひ
て。彼処の樹蔭に幽室規をり。共音を忍ぶ袖の雨たえて霽間ありしに
寔に和主が母刀自の傳稀ある老女よ。そ又和主も男見られ。母は驚れぬ
仇人ありて。歎る身を恨む。自害せんと思ひ定め。潔くいざあれど。ふて
死に物死て常言ふの藤とも。詮合つれ小ひとろの計較あり。母の志は
情らど。和主が命を果せべし。ゆと。物死せまほ。き致といひ。全女容
を改め縁由をまられ。今更匿む。もわらん寔にあん身のりかお
の産砂と。そあつる浪華あて。脱れがた恥を隠して路残を贈られ
今亦必死のこれを救ふ。謀を授らる。心を教を受ざらん。説示しあひ
ねと飲ひのまるる目。涙額つ。土もあめり。あつる。気を引女んと四五六。

ほろりふ打り笑。ふて。母を説き。逃去。赤根が後者。ゆりま
る。竊ま。謀の忽。地。浅ん。と。精。い。道。密。示。を。の
耳貸ね。と。あ。密。諸。う。ら。點。頭。う。ら。今。夜。本。と。虚。空。藏。越
の。捷。徑。より。彼。山。を。登。り。人。た。れ。ど。彼。大。刀。を。こ。や。音。高。し。樹。の。木。耳
若。も。物。の。み。憚。り。月。の。光。も。二。更。の。過。り。う。ら。山。路。を。ま。り。あ。は。丑。の
過。る。比。及。小。必。彼。処。に。到。る。べし。と。い。く。と。い。を。あ。い。立。れ。ば。う。ら。あ。ら。全。女。を。
母の屍をい。と。と。隣。踏。間。小。四。五。六。が。倍。と。い。く。遺。櫃。を。穴。竟。と。初
引。投。死。鎖。村。ら。切。り。物。と。り。出。し。と。亡。骸。を。懸。り。納。り。弥。陀。憑。む。と。い
忍。辱。の。遺。櫃。ら。う。ら。あ。ら。あ。ら。全。女。が。肩。に。浅。瘻。の。あ。り。う。ら。あ。を。ら。背
負。ひ。身。を。起。し。所。定。ぬ。野。辺。送。り。母。の。去。年。の。愛。物。結。借。債。償。を
欺。詐。の。棺。も。り。の。實。り。と。う。り。て。あ。る。敷。死。よ。お。ほ。坂。を。越。り。大。和。の。土

とある人を一研といひりし。死花よりぬ身のよき世の事あらうん
 秋とどひらまつ四五六と先へらしてぞいそぐやく。清知は羊に進りり

焼刀おのり

半之進

の神酒
 くれ酒
 けり



の程小り帰る来々ん小松が中小身を借し。一五二十をゆと張ひ今全
 女と四五六かまきり去るをええと歩と出丹が死のほり。いくたひり
 めやま。鮮血は漆たる順勝の丹佩刀をぬ取まつら戴た
 小挑燈高く揚新の著たる刀尖の血をうち返一倍とえて。さへこの中い
 声とともよ。一町をりきり過たる全女も四五六も。せどろねみやりえり且か
 月より明き挑燈を引提り彼知は立人あり。あのが往方をあらまど。

全女



四五六

りつともよ小石を搔廻て殺矢と打のやま。び打かたる挑燈の火
 ころゆ先へ減りゆく。亡骸あがら三人つん足小信しきまね。

米谷の御塚

却説全奴四五六八兵管より支りつ。岩屋谷と虚空藏地のの間ある。山田のほらり小末より月へ甲夜より隈ありて。滑り便りあらねど。途々半遠より離れ追人もいりて。まご末より小雲時熱てあそ。又支りゆと此彼九折る樹下より立ち上りつ。株は尻をうけ。額の汗を押しひりどとる程よ。とられを手のかゝる墓所より。山田の野小雲見新石塔影建る當下四五六と。全奴をえりていつよわれをえあへる致今いづらげも墓所のほらり又熱い負たる母川の亡骸をさへ葬る因縁あらめ。さへ重荷を背撓負て。路をさるよ自在あらど。さうじつ天の明るづひつるもあひるけん。とく瘞あへといへ全奴と今更別れもさ小惜まじ。何とも回答難たりしが数回歎息。大川の母の本貫あれども。うらが身あはる旅なり。されば葬のつ憑むべき寺もさ。この処へ亡骸を藏めまぬらせん。便宜は似たれど引導読経の声もはせん捨るが如く瘞んゆ。そのふとての忍びがう。それ由火急の一大ふふ。とひつるもあらづ。ともせんが。鋤あへとも齎まへん。借んも更閑る。人家のいとも遠るり。といせもあはるそのさ。さう易し。えあへ。彼処の土を穿起し。あつく穴を掘たるり。右手の卵塔へ倚りけたる鋤盤は忘とてあはる物とせん。ゆゑあはる。あはる里人の死たるを盟の且用は葬んとす。甲夜より藤で張里坊は掘せしる安あるべし。と熱い。とあはる。それ彼安をえりて。おまか母川をこの処へ葬べた因縁のありけんといひ。加禰今夜米谷へ赴くとも。木精塚を掘起し。鋤盤あへて。空の山へ空く帰るが

如し。あつふ小今由くまき。鋤整さへは獲たるも。天の賜あらまき。竹をや
 ちがうらうら。と説諭せむ。全女有りと点頭。遠く遺櫃を扛あらし。
 件の盤をとり取て。別穴を掘んとするを。四五六急推とめ。全女よ。
 噫和主の律義あるのぞ。と。埋よとめぬ。ちり小掘たる。穴のあを
 んばや。と。指さ。全女いらるを。ゆび。その簡畧も物よ。るべ。僅よ
 一の穴を掘とも。つら。時をうら。今今。其処へ葬らば。人の墓を籍
 ら。天も明か。忽地よ。舊の跡主よ。掘捨られて。終よ。財の腹を肥さん。
 僅よ。一を知さ。ごも。し。ま。ご。の。二を。ち。ら。ぶ。り。り。ま。ご。よ。此。処。の。寺。内。に。
 あら。ご。一。の。墓。所。を。れ。が。あ。め。く。定。る。ま。あ。り。て。化。々。の。葬。を。ば。ゆ。も。許
 さ。ご。あ。ら。ふ。と。れ。い。その。亡。骸。を。ご。の。ほ。ら。り。埋。め。ご。う。や。痛。く。埋。る。と。も。

新よ掘たる。壞の蹟の。跡の。掘の。あら。ち。ら。る。べ。里。人。ふ。れ。を。て。疑。或。は。怪。
 終。小。これ。掘。起。さ。ぶ。却。て。母。の。亡。骸。の。竹。処。へ。捨。ら。れ。ん。も。又。量。り。じ。あ。る。
 小。今。の。穴。へ。葬。る。と。れ。の。彼。死。主。縁。故。を。問。む。り。鬼。神。あ。ん。ご。り。り。り。
 こと。お。そ。れ。惑。ひ。て。あ。つ。小。掘。も。く。さ。を。彼。新。葬。め。ら。う。と。も。に。叮。嚀。小。苦。
 提。を。終。ん。放。さ。る。と。れ。い。これ。一。錢。を。費。さ。ご。ご。親。の。お。よ。読。經。は。
 永。く。苦。提。を。終。ら。ん。又。憐。れ。た。好。事。あ。ら。ま。や。られ。鳥。屍。穴。を。穿。く。
 する。謀。と。れ。あ。め。り。と。ほ。ら。り。う。よ。説。示。せ。ば。全。女。い。お。ら。ご。も。堂。を。撲。地。
 と。拍。寔。し。母。ん。身。の。吾。黨。の。文。珠。を。り。可。惜。男。子。小。賣。鐵。を。ご。ら。る。み。
 ち。唱。嘆。し。遂。よ。母。の。亡。骸。を。件。の。穴。へ。お。さ。め。小。掘。れ。ば。四。五。六。さ。う。ひ。く。
 ぐ。整。り。て。壞。を。覆。ひ。う。け。押。さ。る。踏。着。く。さ。て。傍。よ。り。除。あ。る。石。
 塔。を。封。し。て。上。居。太。山。密。の。枝。折。ら。り。き。墳。墓。の。左。右。挿。し。く。

回向志ぬへとのそがせが全ぬいあまひ濡と袖の露を拂ひぬへど額つれ
 くの身のひらいたもるた親の後の世せめて安れと念ざれ四五六も孫
 陀佛くくくく。とくり返る芋環の糸あらあくよいとびくおほそ
 うもあまうぬゆて全ぬいうち念ふ。うち念ふつ頭を擡彼石塔を月
 光よとらんわうんく眉根をくをの彫著なる方ある文字の見あれた
 公持ぞむる四五六あん身よの誦やせん誦くうらてゆせぬといは聞ら
 透し見く。文字を墨まきく深なるの夏雲独峯信士とあり。又逆朱
 を入れたるの春月清光信女とあり。され正しくその妻あて頃日身ありり
 たりあれば親族らへ送葬し。同堂へ埋んとて豫く穴を掘せ
 ありん。その身をびびく全ぬい。どつど小膝を礎と打。く不思議なるも
 のりなり。うら養父次四郎との戒名を夏雲独峯とすうらり。あつる小
 の石塔よあま戒名あるのまらん夫婦とあ不あく逆朱をに入れて
 春月清光と彫著なる。その安へつが母を葬るはその前の世より。
 この山圃の土とある因果小こそをいさらめ。されが戒名をくも用
 ころが母を春月清光と稱へん奇あり。奇あり。と只言は嗟嘆して
 己ざれば四五六も今さらよ脱とぬ終の友がたを。く小結びくちせり。
 され四五六か思ひ量り。よ一点錯ぐの穴を掘せ。くく虚空蔵の
 属村ある。大象地の。禿毘法師木阿弥陀佛とくありのり。父の某思
 十九箇年前よ世を遊して母のまじり。六十の春の夢とえて病癒ふと
 もあく有一夜寝死よ死よければ。木阿弥陀仏哀悼。堪も父の安へ合
 葬んよ今宵中。その穴を掘らせ。黎明の比及よ里人とり。穴小
 棺を穿りてまき。えれば掘り穴埋てあり。く何りの夜の中よあく

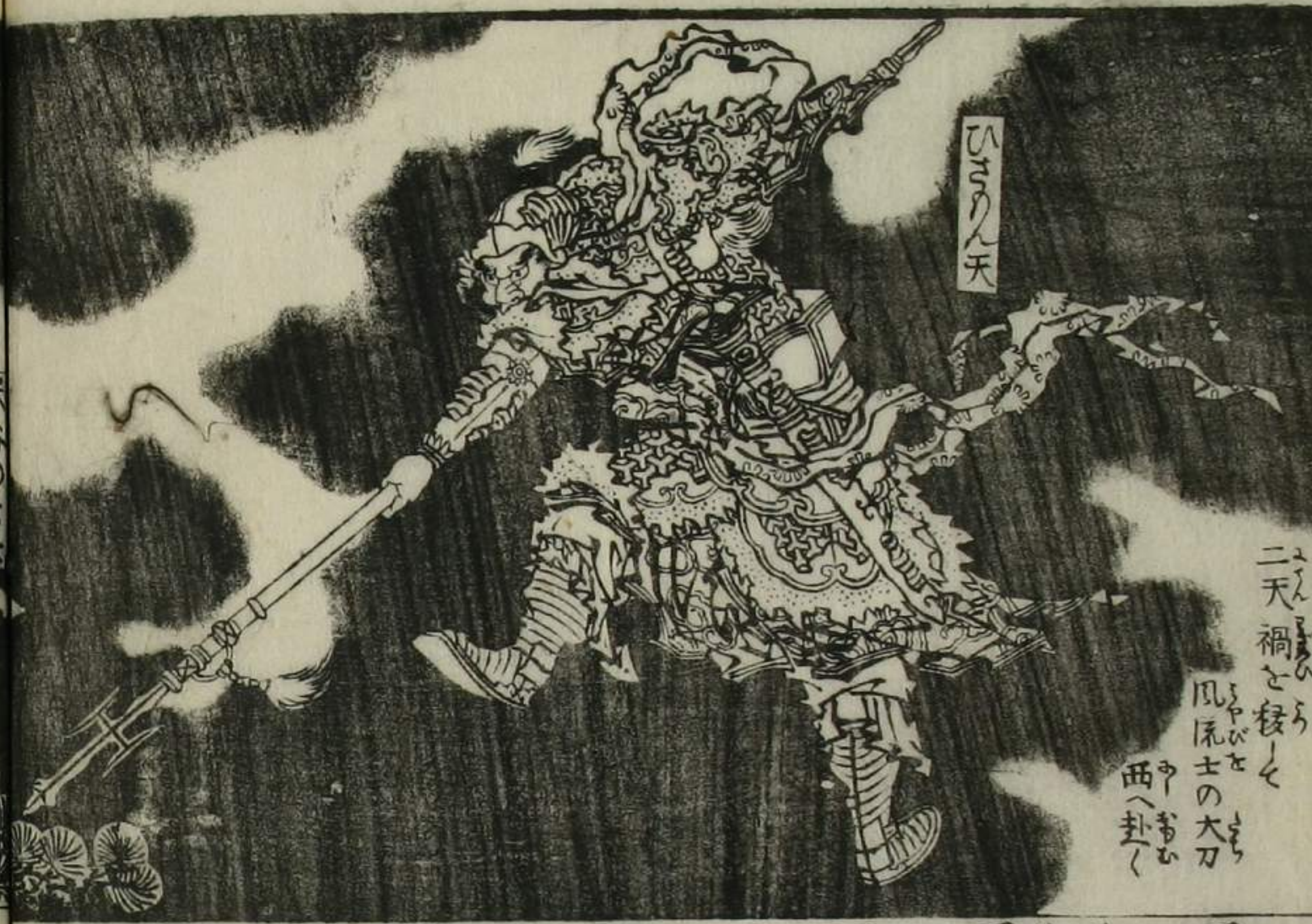
の石塔よあま戒名あるのまらん夫婦とあ不あく逆朱をに入れて
 春月清光と彫著なる。その安へつが母を葬るはその前の世より。
 この山圃の土とある因果小こそをいさらめ。されが戒名をくも用
 ころが母を春月清光と稱へん奇あり。奇あり。と只言は嗟嘆して
 己ざれば四五六も今さらよ脱とぬ終の友がたを。く小結びくちせり。
 され四五六か思ひ量り。よ一点錯ぐの穴を掘せ。くく虚空蔵の
 属村ある。大象地の。禿毘法師木阿弥陀佛とくありのり。父の某思
 十九箇年前よ世を遊して母のまじり。六十の春の夢とえて病癒ふと
 もあく有一夜寝死よ死よければ。木阿弥陀仏哀悼。堪も父の安へ合
 葬んよ今宵中。その穴を掘らせ。黎明の比及よ里人とり。穴小
 棺を穿りてまき。えれば掘り穴埋てあり。く何りの夜の中よあく

ありんと怪しく。あやび壞を掘起せば、燈櫃の内は在死の老女を納
 たるなり。年の齡は木阿弥陀佛が母は等しく見えたるも、誰よりされず
 發るざらん。この初めの所あり。とまなく疑ひ惑ひつ。絶主も道者も立
 はどひて果るもあり。かきりもつり。只とり捨ると罵るものなり。當下
 村長且尋思し。木阿弥陀佛はよいか。大和の國のちぬるれと神
 武天皇以降化の姿を棄て。母のが葬をせり。身をすくふ。顧みら
 の高峯より鼻鼻の高れ。称達多り。そ全く鼻高殿の所あり。あ
 べ。さあを後の宗をもおつ。腹た。ととりも捨るべ。却て大なる殃
 危るや。あべからん。只この燈櫃ある亡骸を。舊の如くよ。瘞る。その
 ほろへ。母を葬り。花をま向ると。い。のろとも。小日向寧都婆を建る
 日あり。のろとも。又建と。べ。此彼一體の心ひを。す。苦提を。終。つ。

たり。た。能。賊。鬼。の。わ。ら。た。あ。せ。ん。ま。宗。も。あ。り。の。切。徳。よ。う。そ。母。の。こ。ら
 る。り。母。身。も。現。當。二。世。女。樂。疑。ひ。の。ら。と。説。示。せ。ば。衆。皆。有。理。と。稱。賛
 一。聽。て。晚。稻。が。亡。骸。を。舊。の。ど。く。小。埋。つ。その。傍。に。穴。を。掘。て。木。阿。弥。陀。佛。が
 母。を。葬。り。母。の。石。塔。を。新。に。建。て。お。り。戒。名。を。彫。著。たり。と。い。て。け。こ。ろ
 の。人。の。心。さ。る。素。朴。ある。よ。う。た。く。さ。辺。の。山。あ。と。ろ。の。小。縣。小。て。人。と。人
 の。言。を。推。さ。げ。を。め。り。木。阿。弥。陀。佛。の。村。長。が。教。え。情。ら。せ。件。の。亡。骸
 を。何。処。の。誰。と。あ。ら。ね。ど。も。さ。う。母。と。り。共。に。香。を。燒。花。を。子。向。月。忌
 年。回。の。追。善。を。い。と。り。遂。ま。う。行。ひ。け。ら。の。善。根。を。極。た。れ。が。あ。る。後。あ。り
 彼。亡。骸。を。全。収。か。母。と。あ。る。の。ま。ら。ど。その。身。も。稀。る。幸。ひ。あり。り。是
 こそ。先。近。々の。田。夫。牧。童。縁。由。を。け。悞。て。う。う。怪。え。大。象。ある。木。阿。弥。陀。佛
 が。母。の。葬。り。と。た。亡。骸。が。あ。る。小。さ。り。ぬ。世。小。離。鬼。病。と。て。形。貌。の。あ。る

小えゆる病ありとて死にけり。死にけり亡骸のふらふらあるとのかめり。彼も
 及ぬ事なむ。かたてえよう。かたてえよう。戒名を彫著たる石塔が並びて有るど
 とも。殊更よひのありあり。あまう。秘は彼空より埋たりまれば死骸の
 主出するところ。近々の徒又とらう。を伴へて安原末木阿弥陀佛が母の軀
 のふらふらありたるありあり。かたてえよう。かたてえよう。果は笑て已
 りれど。さうも遂は人口は膾炙して。舊の主の出る壁言ふ必元の木阿弥
 とぞいひける。この諺の濫觴は塩尻の明王百穀編にも載られたれど。小
 説とてそのとらふ大同小異。且塩尻の頃慶の時のこと。元木阿弥
 陀佛が母。この下は話あり。却説全女の母をい既に奉りて。今以後をいそ
 四五六のころとも。彼鋤鍬を携はず。又只愛ふまゝ。存す。幸しくとて
 米谷ある。木精塚のほとり。よまよひり。あられども。まぶ。天の明も。端も

中どまり。よければ。石湯を結び。咽喉をうけほ。さて全女の四五六
 対ひ嚮まゐるの遠く。て全くあん身が謀を。実果ど。やう行ふべし。う
 を。説あら。一ゆへと。四五六。それば。よ。羊と進小先。さうさ。この
 塚を掘起。彼風流士の太刀を奪ひ取る。と死に。その咎。羊と進が。牙
 小。お。ま。あ。ん。さ。う。ら。い。和。主。の。手。を。も。や。さ。ん。実。父。の。怨。を。復。す。よ。め。ら。ば。や
 時。の。治。が。さ。く。失。ひ。易。し。さ。う。さ。と。促。す。が。全。女。は。さ。う。さ。く。飲。ひ。か。ん。身。が
 謀。究。り。妙。あり。彼。太。刀。失。る。が。羊。と。進。の。平。城。へ。歸。る。を。お。も。ん。
 う。や。阿。容。と。歸。ると。も。続。井。坂。の。怒。烈。く。て。安。徳。小。の。じ。あ。ま。づ。ら。ん。
 母。の。今。般。の。言。の。禁。小。情。ら。む。之。を。怨。の。及。ひ。彼。風。流。士。と。ま。ん。り。の。あ。り。
 さ。う。さ。く。整。柄。握。り。ら。向。上。る。か。く。山。深。く。槽。赤。松。生。茂。と。管。竹。が。下。の
 水。の。音。も。委。ね。ら。る。潔。た。朱。の。玉。離。上。久。く。塚。の。左。右。は。秀。倉。の。り。彼。首



二天禍と候し
風流士の大カ
西(卦)く



天財天

是首とつん久とび。両社の鳥居も額
を打て辨財天女。毘沙門天と筆太
写したる。金堂の月も照そひて尊
もめれど今宵うら。かよ着たる蓑衣
の汚れ奴忌て近くも糸あらど挽残
たる楠の土より上一丈
むらむら。
あかやまの
大く石も化
たるを。あて碑石
小用ひつ。木精塚の
三字を彫たり。それを
掘發んよ。や百人か
ららる借
とも一朝一夕よ
さへへうのやらど。
四五六も全ぬも。あひの外のみふねえ
る。只忙然とまほりてをり。あて止
ぶたよあらね。さりとともとあひうて。
まづ試まよ。楠の株のあられたる間
を掘まよ。正よ是風流士の大カ。再び
人間へ返るべた時。帯あひりん。あふま
似を株の朽て。帯を塊よひと。両入



掘發んよ。や百人か
ららる借
とも一朝一夕よ
さへへうのやらど。
四五六も全ぬも。あひの外のみふねえ
る。只忙然とまほりてをり。あて止
ぶたよあらね。さりとともとあひうて。
まづ試まよ。楠の株のあられたる間
を掘まよ。正よ是風流士の大カ。再び
人間へ返るべた時。帯あひりん。あふま
似を株の朽て。帯を塊よひと。両入



されし勢ひつれて息をも絶と揚るほど小土中五六尺ぐりりはして果し
 物の見はあんなりと競ひあつまつ。うろくあて引出せば紛ふべうもあらぬ宝
 飯の唐櫃に残雪の凍より一。夜の山風膚を徹し狼のま音谷小室
 毛骨栗然とぐりりされどそれをバ層とせぬ。兩人はまらぐ力を裁せ度
 を採断てこれを見るに皆只三重とあがりと。櫃の中は又管あり。その鎖をも
 せりやみねら放ちて第三の管は至までひらきすれども蓋開くべからずの
 る。時を待つと山路まき夜をぬく。半之進ホもあらぬが謀じり
 も仇とありあんな只打碎け。と四五六が。あり揚る打鋤い。あまひひかりて
 友ふる間を抜と全奴が。整盤柄高く礮と打丁と。葦石と数回打れて
 管の碎れ風流士の大刀頭と出たり。さればこそとと全奴が取らんと
 するに奇きうる塚の中より吹出と。魔風顔は面を打彼風流士

中天へ吹揚とをええたり。大刀の須臾閃たつ。平城のわさ。赤まらんと
 時。鬼門堂の門扉さると開け。異相の天王忽然と立ちあがり。い
 るの長た鞘を取。面を怒ら。眼を睨。虚空遙く閃たゆ。大刀
 を追慕追突。合なる鞘をとり伸。打落さんと云ぬ。へん大刀の連
 と。怒る平城のわさ。いほもあんな。舊の空へらんとすれ。蟬婿たる天
 女。辨天堂の上は立のら。抱る琵琶の撥をりて。徐す小招た。う。これ
 取らんと。あ。折魔風と。び吹暴れ。月さ。暗く。あ。う。小大刀の
 顔。光を放ち。その声。絹を裂。西を投。赤ま。正。是天王
 天女の擁護。ふ。順勝の身。あ。ゆ。その綱を西。う。して。
 今。八月下旬。大内陶が。小保。家の。乱を。今。あ。や。あ。の。塚の
 鬼。小。全。も。四。五。六。も。小。の。鋤。盤。撲。地。と。擲。捨。て。酔。師。が

如く醒る多く張つめが為歎むさうの弓とり月の西と瞻仰して
ほいめしう。

占夢南柯後記卷之三終

女訓女訓 女前訓 舂種一冊 鳴鳩菴先生述

鳴鳩菴先生述。女訓。女前訓。舂種。一冊。鳴鳩菴先生述。
七也より十二才までの内小おしを處と事とを辨し。女訓。
一は後男姑父母夫仕。孝貞の道。夫は女訓。女前訓。
質素節儉と守る操と正しく事とを辨し。女訓。
佳昔より名とけりや。賢女節婦の傳と事とを辨し。女訓。
婚礼の式化法子と有つ事。衣履を著く事。乃心以。
男女相姓名。頭字。辨し。女訓。女前訓。女前訓。女前訓。
文解。二十。六。種。の。教。訓。事。その。外。女子。は。女。訓。の。外。
教。を。宗。と。鳴。鳩。菴。先生。より。七。代。夫。人。切。推。し。ぬ。の。と。事。

女くありてく佳入しを中女をひかへともりて中
久字小志うへんはむとく婦女の義別と海内を
世書幼稚うへ一代に試投さばして讀むの村
雷々々バく婦徳と備ふる大いよ有益の書なり

心學子五則

全書冊 孫田村松先生作

人倫の心法といふを持故積仁知命知長香の五則
の意も學ばざれば是れ知れずとありて試と先生五則乃
人まかりんまて平かよとて批解見書は時より善とす
仁義の道に如く自ら質素節儉と極み立身出世す
真海とす。世上を比乃善なり

